批評と紹介

『ヴェラー教授記念東洋學論文集』

辻　直四郎

Asiatica. Festschrift Friedrich Weller. Zum 65. Geburtstag gewidmet von seinen Freunden, Kollegen und Schülern. Herausgegeben von Johannes Schubert und Ulrich Schneider. Leipzig (Otto Harrassowitz) 1954. 21×29 cm., XIX+902 pp.

近年出版された記念論文集も數多い中、本書のごとく、內容・分量・體裁において、壓倒的威容を備えたものは、他に比を見ない。フリードリヒ・ヴェラー教授の學術的活動は、Über die Prosa des Lalitavistara (Diss.), Leipzig 1915に始まり、サンスクリット、パーリ、チベット語、中國語、蒙古語、ソグド語等で書かれた廣義の佛教文獻の解明に盡した功績は、極めて顯著なものがある（本書 pp.XI—XIII「著作目錄」參照）。最近は Versuch einer Kritik der Kaṭhopaniṣad (Berlin 1953) によつて、ウパニシャッドの研究に貢獻し、中亞出土の寫本の中から、馬鳴作二敍事詩の斷片を出版し（Zwei zentralasiatische Fragmente des Buddhacarita, Berlin 1953; Ein zentralas. Fragment des Saundarananandakāvya, Berlin 1953）、梵文學者に新資料を提供した。しかもその視野の廣く、興味の多角的であることは、書評の一覽表（pp. XIII—XIX）から窺われる。從つて彼に捧げられた記念論文集の內容もこれに相應して多彩を極め、東洋學の全般にわたる壯觀を呈している。寄稿者は歐米印諸國の五十五家を數え、六十頁を越える論文二篇を含んでいる。本書を批判するには、これを受けたヴェラー教授自身の博學を必要とし、筆者は到底その任に堪えない。しかし本書の重要性に鑑み、その內容を紹介することは、インド學者のみならず、一般に東洋學者に益するところがあると信じ、これを敢えてすることとした。もちろん筆者の專門とするインド學（特にヴェーダ學、梵語學、梵文學）に關する論文については比較的に詳しく、その周邊或いは更にシナ學、日本學に關するものについては、簡單に述べることとした。排列

の順序もこの方針に添い、必ずしも厳格に學術的な分類を旨としなかつた。

〔ヴェーダ學〕 純粋なヴェーダ學に屬する論文の極めて少い中に、ヴェーダ文獻全般の廣い基盤に立ち、文學形式の推移を指示したものに、Louis Renou: Les vers insérés dans la prose védique, pp. 528—534 がある。(大意)黑ヤジュルヴェーダ・サンヒター、タイッティリーヤ・ブラーフマナ、パンチャヴィンシャは、散文の中にマントラ以外の詩節を含まないが、ジャイミニーヤ、カウシータキの說話は若干の詩節を伴う。アイタレーヤは孤立した詩節の外、その新層において二回にわたつて連續詩節を含み(VII. 13—18: Śunaḥśepa, VIII. 22—23: Mahābhiṣeka)、シャタパタは七、一一、一二の中に少數の詩節を有する外、一三に長い連續詩節をもつている。シュラウタ・スートラは、例外的に說話を含む場合 (e. g. Śāṅkh.) を除き、その本來の性質上詩節を挿まないが、グリヒヤ・スートラは若干の詩節を伴い(Āśv., Śāṅkh., Mān.)、ダルマ・スートラに至れば詩節は益々引用の性質を帶びてその數を增し (Vās., Viṣṇu, Baudh., Āp.)、出所も多岐にわたる。散文ウパニシャッドにおける詩節の挿入はむしろ控え目であるが (Chānd., Kena, Kauṣ., Praś.)、ただブリハッド・アーラニヤカは二個所において連續詩節の獨立的使用に進展を示し(III. 9. 28, IV. 4. 6—21)、カタ及びムンダカに至つて、遂に全く散文の羈絆を脫するに成功した。以上により、最古の散文文獻以來、マントラに由來しない詩節の挿入は次第に增加し、祭式に關する箴言、寓話を示唆する斷片に始まつて、徐々に散文の領域に侵入し、詩節の連續に發展したことが知られる。內容的には、リグ・ヴェーダ及びアタルヴァ・ヴェーダに源をもつブラフモーディヤ(神祕的な謎)の系統をひき、使用される位置については、好んで段落の末尾におかれる傾向があり、後世の文學形式を暗示している。これ等の詩節の言語は一樣でなく、ブラフモーディヤ或いは箴言の類の言語は、一面においてヴェーダ語でもなく、他面において厳格な古典語でもなく、部分的には通俗的要素を含みつつ、文法的に自由な態度を示している。

Richard Hauschild: Das Selbstlob (*Ātmastuti*) des somaberauschten Gottes Agni (Ṛgveda x, 119), pp. 247—288 は、Labasūkta (鶉讚歌) として知られるリグ・ヴェーダの一讚歌に詳細な解說を施し、最後に飜譯を添えたもので、インドラとの關係において解釋するインドの傳承及び近代諸家の見解に反對し、祭火アグニの獨白と說明した J. Hertel の說 (Die awestischen Herrschafts- und Sie

gesfeuer, Leipzig 1931, pp. 161—167) を支持し、この方向に徹底した注解を施している。またこの讃歌の中に神に對する輕侮を見出すことは、現代人の偏見にすぎないとして排斥される。Geldner の譯注を經た後でも、リグ・ヴェーダがなお多くの難問題を藏していることは、本論文の著者による單語の言語學的・文獻學的說明からも窺い知られる。

Paul Thieme: Die Wurzel vat, pp. 656—666 は、リグ・ヴェーダにのみ殘る動詞 api-vat の意味を決定しようとしたもので、著者自らその結果を次の如くに要約している (p. 660)。

Vat "blasen" (mit *api*: vgl. griech. *ἐπι-πνέω* "[Feuer] anblasen, inspirieren"):

1. I Kl. "anblasen" (*krátum* "[Geistes-]kraft": VII 60. 6; VII 3. 10);
2. X Kl. ["angeblasen machen"=] "anblasen" (den Agni: I 128. 2; *mánas*: X 20. 1; *mánas, dákṣam, krátum*: X 25. 1; *manmanāni*: I 165. 13);

Red. Aor. (*ṛtám*: X 13. 5);

3. *svapivāta* (Vok.) "von gutem Anblasen Begleiter!": Vll 46. 3.

Av. (aipi) vat も全く上記の意味によつて了解される。

Ar. vat の起原として設定される IE *vet, vot, vat 'blasen' (Ablautstufen: *ut; *vēt, vōt, vāt) から派生した名詞語幹を、個々の言語について列擧し、特に詳しく Lat. vātēs m. (*vāt-ēu-s: Acc. *vāt-ē-m): IE *vat ('blasen—inspirieren—Dichter', cf. Lat. vāt-, vāti-, Ir. fáith) について論じ、リグ・ヴェーダに見られる詩作の根元は、究極において印歐共通語時代に求められるとしている。なお marút-'die Monsunwinde' を mar-út 'vom Meere her blasend' と說明しているのは、その當否を別として、注目すべき新解釋である。

〔サンスクリット〕 T. Burrow: The Sanskrit precative, pp. 35—42 は、古典梵語の Precative の起原を、ヒッタイト語及びトカラ語の資料を利用しつつ、歷史的に解明したもので、その結果は印歐語比較文法に對しても重大な示唆を含む。Prec. 形はリグ・ヴェーダに萌芽を發し、その後のサンスクリットにおいて急速な發展を示し (Act. 2 and 3 Sg. bhūyās, Mid. 2 Sg. bhaviṣīṣṭhās, 3 Sg. bhaviṣīṣṭa)、古典期のパラダイムは、これに類推的擴張を加えたものに過ぎない。從來の說明と異り、著者は最も古くから使用された形、-yā-s を出發點とし、そのインド・イラン共通語時代にさかのぼることを、Av. -yã (fratuyã, aiwi tūtuyã Y 9. 29) によ

つて證明し、ついでヒッタイト語 hi-conj. の Pret. 2 and 3 Sg. (e. g. tarnaš) における語尾 s、トカラ語の s-Pret. 3 Sg. Act. (e. g. A ñakäs, B neksa) の s、その他の例證(特に Phryg. εδαες 'placed' 3 Sg. Pret. : Hitt. dāiš) と比較し、3 Sg. Pret. の語尾 s の存在は、印歐共通語時代に求められると主張する。ヒッタイト語及びトカラ語における上記の s 形と、いわゆる s アオリストの關係については、むしろ前者を基礎として後者が發達したと考え("The s-aorist as such is a post-Hittite development of Indo-European." p. 41)、ヒッタイト語及びトカラ語の印歐語母體からの分離は、s アオリスト形成以前に屬すると結論している。最後に著者は、Precative と Optative との關係、その分岐、差異につき一言して本論文を終り、RV x. 11. 9 の bhūḥ (Injunct.), syāḥ (Opt.) においても、上記の古い語尾 s を含む三人稱單數形が認められると附言している。

次の三篇は、いずれも語義の研究に關するものである。

Wilhelm Rau : Lotusblumen, pp. 505—513. 梵文學の作品中に頻繁に現れる睡蓮と蓮との名稱を、馬鳴の兩敍事詩、Gāthāsaptaśatī (Kāvyam. 21)、バーサに歸せられる劇十三種、ムリッチャカティカー、カーリダーサの作品(リトゥサンハーラを含む)、バルトリハリの三シャタカ、キラータールジュニーヤ、シシュパーラヴァダから蒐集し(百一項)、二大別(A. Nymphaeen, B. Nelumbien)の各々を花の色によつて分類したもの。植物學的に精密な規定は、今後に殘されているが、從來の辭典の通弊と認められる不正確・混亂を是正するに、多大の便宜を提供している。

Gustav Roth : Mohanagṛha in Prakrittexten, in Kauṭilya's Arthaśāstra und in den Annalen des Ṭabārī, pp. 535—552. ジャイナ教白衣派聖典の第六アンガ (Nāyādhammakahāo) の第八章 (Mallī-Jñāta ed. G. Roth, No. 39)、カウティリヤのアルタシャーストラ一・二〇、その他の關係文獻を比較檢討して、Skt. mohanagṛha, Pkt. mohaṇaghara の意味を、"Ein Irrganghaus, Trughaus mit Geheimwänden und Gängen, in dessen Mitte ein oder mehrere garbhagṛha——Zentralgehäuse angelegt sein können." (p. 543) と定義したもの。"Liebeslusthaus" といふ意義は(特に Raghuv. XIX. 9)、一次的のものに過ぎない。附錄として、devatā-vidhāna (Kaut) の意味を、"Anlage in Übereinstimmung mit einer Schutzgottheit des Baugrundes" (p. 549) と定め、Āvaśyaka 文獻の一物語中にも、上記の意味における mohanagṛha が豫定されていることを論じ、Ṭabārī Bd. I (ed. Cairo, p. 257. 9

sqq.) に Mallī-Jñāta の記述とパラレルな內容をもつ個所のあることを指摘している。

Hartmut Scharpfe: Kleine Nachlese zu Kielhorns Übersetzung von Nāgojibhaṭṭas Paribhāṣenduśekhara, pp. 570—574. 定評あるキールホルンの飜譯に對する若干の補正。1. arthāpatti=arthād āpattiḥ 'unmittelbare Folgerung'; 2. asaṅgatam, saṅgacchate 'Inkongruenz, Disharmonie, harmonieren'; 3. buddhi 'Vorstellung'; 4. vyabhicāra 'Fehlgehen'; 5. spaṣṭam 'deutlich, klar.'

〔中期インド語〕 Franklin Edgerton: The Middle Indic verb system, pp. 78—81. 實用的觀點に立つて言えば、全ての規則的な中期インド語動詞形は、現在語幹を基礎として作られ、名詞の第一次派生語(primary noun derivatives) も、普通これから作られた。少數の 'relic-forms' は別として、中期インド語動詞語幹は、㈠ a (the thematic vowel) 或いは㈡長母音 (最も普通には e、しばしば ā、稀には ī または o)に終る。㈠は母音で始まる語尾の前で落ち、㈡は保たれて語尾に屬する母音が落ちる。パーリ語アオリストにおける語尾 i と si との分布も、この規則によつて明確に說明されることを、實例によつて論證し、或る言語の歷史について知られている事に影響されて、その記述的樣相を歪曲する危險 ('the historic fallacy', 'historicism') に對して警戒を與えている。

Ulrich Schneider: Acht Etymologien aus dem Aggañña-Sutta, pp. 575—583. アッガンニャスッタ(Dīgha III, p. 80 sqq.) に含まれる八語 (Mahā-sammata, khattiya, rājan, brāhmaṇa, jhāyaka, ajjhāyaka, vessa, sudda) の語原的說明に對し、著者はパーリ語聖典が更に古いプラークリット語聖典からの飜譯であるという假定を前提として、音形上著しく不自然な說明は本初のプラークリット形に還元することによつて了解できると主張する。例えば khettāṇaṁ patiti…khattiyo において、khattiya (Skt. kṣatriya) は元來 *khettiya (cf. kṣetriya Mahāv. mss., khetta-vijjā=kṣatra-vidyā) であり、khettāṇaṁ patiti… *khettiyo と還元して始めて音形的に自然な說明が得られる。パーリ語聖典を一般にプラークリットからの飜譯と見なすことは問題であるが、インドの通俗語原はしばしば飛躍的で理解に苦しむことも事實である。個々の場合には、本來或る中期インド語において少くも音形上自然であつた說明の一部をパーリ語化したため、不自然な結果を生じた場合も考えられる。

L. Alsdorf: Der Veḍha in der Vasudevahiṇḍi, pp. 1—11. ジャイナ・マーハーラーシュトリー語で書かれたジャイナ版ブリハット・カターすなわち「ヴスデーヴァヒンディ」を學界に紹介し(XIX. OC, Roma)、その言語の詳細な研究を發表した(BSOS VIII, 1936, pp. 319—333)著者は、ここに再びその韻律に關して重要な論文を寄せている。Veḍha は一定の律動に從いつつも、本格的韻文と詩的散文との中間に位するもので(cf. Jacobi ISt XVII, p. 389 sqq., Schubring ZII II, p. 189 sqq., Die Worte Mahāvīras, p. 3 sqq.)、從來ジャイナ聖典(特に Samosaraṇa, Jiṇacariya)の中の修飾的要素として知られていたが、「ヴァスデーヴァヒンディ」において始めて本格的使用が見いだされ、しかもその全篇に分布していること、聖典からの借用でないことは、注目に値する。Veḍha に關する限り、「ヴァスデーヴァヒンディ」は、古典的ジャイナ聖典と時代的に隣接することが明かにされた。

Joseph Friedrich Kohl: Einige Bemerkungen zu den Tierlisten des jinistischen Kanons, pp. 365—376. ジャイナ聖典(特に Uttarādhyayana 36, Jīvābhigamanasūtra, Prajñapanā)の中にある tirikkhajoṇiya(大體において背椎動物に相當)の分類表(生息場所に從い、水棲・陸棲・空中飛翔動物に三大別し、更に細分したもの。ただし空想的產物をも含む)につき、その各項目の名稱を語學的に考察し、動物學的に檢討したもの。その結果には興味ある點が多く、インド文學に名高い神話的動物 magara (Skt. makara) の起原を、海牛に歸しているのは注目に値する。

〔インド・イラン關係、アヴェスタ〕H. W. Bailey: Hārahūṇa, pp. 12—21. 古代インド語の研究に、イラン語の知識が高度に必要であるとする著者の持論は、この精緻な論文において再び實證された。Zor. Pahl. (Bahman yasht) karmīr hyōn が spēt hyōn 'white Hyōn' と並んで擧げられていることから出發し、karmīr (cf. Krorayina kremeru) の意味を「赤」と推定し(注釋家 Rōshn によれば、ゾロアスター教徒の敵の赤色は、その帽子・鎧・旗に基づく)、ヴァラーハミヒラの「ブリハット・サンヒター」における hala-hūṇa (hara-, hāra-hº Mahābh.) : śveta-hº と比較して、karmīr に對應する hala-, hara-, hāra- が「赤」または少くも「暗色」を意味し得ることを、Av. harəta, harəda 'dark colour' 等諸種のイラン語について論定している (cf. Lith. sẽntas 'red (of horses),' Lat. sorbum 'red service berry,' IE *ser 'red')。この研究により karmīr hyōn は恐らく 'Red hatted, Red Hūṇa' を意味

し、Hārahūṇa はこれに相應するものと解すべきことが明かになつた。

H. Lommel: Anahita-Sarasvatī, pp. 405—413 は、Av. Anāhitā (詳しくは、Arədvī Sūrā A°, cf. Ardvī Sūr Yasht=Yt 5) と Ved. Sarasvatī とを比較し、天上の川、雨を惠む女神として、その特質を共通にするほか、リグ・ヴェーダとアヴェスタには兩女神の共通起原を推定させる記述が少くなく(例えば辯才・繁殖に關するもの)、アヴェスタにおける女神の本來の名稱は、恐らく Harahvatī であつたと考え、その起原はアラコシアに求められると說いている。(リグ・ヴェーダ特に第六卷の Sarasvatī 參照。)

E. Benveniste: Notes avestiques, pp. 30—34 は、次の四語の解明に向けられている。㈠ Av. hizvā と Skt. jihvā は共に「舌」を意味するが、音的には一致しない。前者から出發すれば Skt. *sjivā を、後者から出發すれば Av. *zizbā を期待する。hizvā を hizū+ā すなわち ā による女性化 (cf. Lat. lingua, etc.) と解し、jihvā の頭子音を語根 jih (cf. vijehamānaḥ……jihvām RV VI. 3. 4) の影響によるものと考えれば、兩單語は統一的に說明される。㈡ Av. xvanva 'frapper, heurter': apa-xvanva 'repousser' の關係は、Lat. pello: repello のそれに準じて了解される。cf. Sogd. γw'w 'frapper'=Av. xvanva, Sogd. γw'y=Av. xvaŋhaya-, Oss. xvayun 'frapper'. ㈢ Av. daγa: Pers. daγ (var. daγ) 'dénué, sans poils, etc.' ㈣ Av. snāvarə. bāzura 'aux bras faits de tendons' において、ra は合成語の末尾に附加された接尾辭ではなく、bāzura は獨立の單語で、bāzu が人間の腕を意味するのに對し、種々の動物の前肢を表わす。

W. B. Henning: Ein unbeachtetes Wort im Awesta, pp. 289—292. は、Farvardīn Yasht (Yt 13. 2—3) の冒頭の一句 manayən ahe yaθa vīš aēm に對する新解釋を提示したもので、vīš を vi-「鳥」の Nominative 形 (Windischmann, Spiegel)、aēm (<*ayam <*āyam <*āwya-) を「卵」の Accusative 形と說明する。これにより全體は最も自然に、「あたかも鳥が卵を(上からも周りからも抱く)ごとく」を意味することができる。

〔インド哲學〕 Walter Ruben: Hegel über die Philosophie der Inder, pp. 553—569. ヘーゲルが Colebrooke: Essay on the Philosophy of the Hindus を利用して、ベルリンで行つた哲學史講義序說 (1825—1826; ed. J. Hoffmeister, Leipzig 1944) を資料として「哲學と宗教」「哲學と科學」等十項に分ち、ヘーゲルのインド哲學觀を拔

萃しつつ、マルクス・レーニン主義の見地からこれを批判したもの。著者に從えば、チャーンドーギヤ・ウパニシャッドにおけるウッダーラカこそ、大膽に自由に唯物論的に思考した人類最古の哲學者であり、その hylozoistischer Materialismus がインドにおける哲學の發端である。また觀念論者としてのヘーゲルと、マルクス・レーニン主義者との立場の相違にもかかわらず、辯證家としてのヘーゲルの洞察は、決して過少に評價すべきではないと論じている。

〔インド醫學〕 Willibald Kirfel : Ein medizinisches Kapitel des Garuḍapurāṇas, pp. 333—356. ガルダ・プラーナのウッタラカーンダに含まれる胎生學に關する一章は、少くも四種の主要なリセンションで傳わり、醫學史のみならず、原典成立史の上からも重要である。著者はこれをその大著 Purāṇa Pañcalakṣaṇa の形式にならつて印刷し、飜譯を添え、最後に外形並びに內容に關する批判を加えている。形態から見れば、Rec. I (Uttarak. adhy. 4, ed. Calcutta Śaka 1812=1890) が、本源的な體裁を保存し、その他は全て二次的・三次的な追加を含み、プラーナの成立過程一般に示唆を與える。內容から見て Rec. I は、インド醫學の古典的傳承と一致しない點を含んでいるが、必ずしも新しい時代に屬する相違とは考えられず、公的教義の傍に存在した他の傾向を繼承したものという假定も可能である。また追加部分の中では、宇宙の構成と人體並びにその機關とを並行的に關係させた一節 (Sl. 53—66) が、最も注目に値する。

Reinhold F. G. Müller : Soma in der altindischen Heilkunde, pp. 428—441. スシュルタ・サンヒター第二十九章（靈藥としてのソーマの種類二十四を列擧し、服用法及び効能を述ぶ）の飜譯を掲げ、シャタパタ・ブラーフマナ四・五・一〇・二——六を參考として、ソーマは古くから既にその單一性を失つたと斷じ、ロート以來の論證にもかかわらず本初のソーマを植物學的に決定することの困難を指摘した後、ヴェーダ文獻がソーマ飲用の効果として說く陶醉狀態に觸れ、その治療力を確實にするため、調製に際してアルカロイドの如き藥物を混入したと考えることも、全く不可能ではないとしている。

Jean Filliozat : Un chapitre du *Rgyud-bźi* sur les bases de la santé et des maladies, pp. 93—102. *Rgyud-bźi* 詳しくは Bdud-rci-sñiṅ-po (Amṛtahṛdaya) は、チベットにおけるインド醫學書中最も重要なものの一つで、モーコ語にも飜譯されている。佛教との關係は表面的に過ぎないが、本書は專ら佛教書に見える「四百四病」に觸れている。この數字の由來については、信賴すべき的確な說明がな

く、結局アタルヴァ・ヴェーダの述べる「百一種の死」にさかのぼるものと考えられる。本書はバラモン教的醫學に立脚しつつ、同時に佛教經典の形式を裝い、病氣の科學的列擧と、佛教の說く傳統的數字との間に動搖を示している。すなわち第一部第二章及び第二部第十二章においては、一應四百四病の分類を擧げながら、第一部第三章においては、病理學的教說に基ずく別個の分類を與えている。インド醫學に對し該博な知識を有する著者は、最後に本書第一部第三章を譯出し、チベット語原文を添えて研究者の便宜を計つている。

〔佛教〕ヴェラー教授の研究が佛教原典を樞軸として展開したことを思えば、廣義における佛教關係の論文の多いのも異とするに足りない。以下これを列擧するに當り、大體インド、中國、日本、チベット、その他の順を追い、必ずしも嚴密な分類法によつて後先を決定しなかつた。

（インド）Helmuth von Glasenapp: Der Buddhismus in der Vorstellungswelt der Hindus, pp. 174—183. バラモン教が佛教を危險な競走者と認めるに至つたのは、後者が嚴然たる一宗教の體面を整えた後である。或る者は兩宗教の間に根本的な相違がないという妥協的見解をとり（アショーカ、カニシュカ、ハルシャの例に倣う統治者）、他の者は全く異質のものとして佛教を攻擊した（クマーリラ、シャンカラ以來の多くの哲學者・宗教家）。なおこのほかに、兩宗教の融合を計る傾向もあつた（例えば、佛陀をヴィシュヌの一權化とする說、八世紀以來）。ヒンドゥー教徒が佛教徒を非難した理由の中には、教義的問題のほか、道德的廢頽に對する反感があり、この見解は長く續いて、佛教がインド以外の諸國において生きた信仰として保たれた事情を全く知らなかつた。近代の宗教改革家（ダヤーナンダ・サラスヴァティー、ラームモーハン・ローイ等）も、佛教に對して眞の理解を持たず、ややもすれば混同の誤りに陷つている。ヴィヴェーカーナンダの場合は、現代インドの佛教觀を代表するもので、佛陀の教義はその中核においてヴェーダーンタの一形に過ぎぬこと、佛陀はカースト制度の弊害に反對したこと、佛教時代はインドの繁榮期であつたことを强調する。この三點の各々に對し、現在も有力な支持者が存在する。

Etienne Lamotte: Sur la formation du Mahāyāna, pp. 377—396. 大乘佛教の一般的特徵を小乘と比較し、大乘興起に關するインド自體の傳承を述べた後、近代學者による大乘南印（アンドラ地方）興起說の根據を檢討してこれに反對し、大乘はクシャーナ朝特にカニシュカ王時代に、インドの諸地域殊にその西北部、中亞のコータンで、いわば自然發生的に興つたものと論じている。なお著者は、法顯・玄奘の

旅行記から、當時の大小乘寺院及び信徒の數を統計的に表示し、佛教はこの期間に、インドの他の地域におけるより西北部に繁榮し、且つ大乘教徒の方が多かつたことを指摘している。

J. Ph. Vogel: The past Buddhas and Kāśyapa in Indian art and epigraphy, pp. 808—816. 過去佛殊に釋尊に直接先行する迦葉佛崇拜の證跡を、碑文、美術遺品（バールフット、サーンチー、ガンダーラ、マトゥラー、アジャンター、タクシラ）、法顯・玄奘・宋雲の見聞記に徵して明かにしたもので、現在知られているストゥーパ及び僧院の數は、かつて全インドにわたつて存在したそれの一少部分に過ぎず、釋尊に對する誠信（Buddhabhakti）が過去佛崇拜に發展し、民衆信仰の重要な要素となつたことを窺うに足りるとしている。

E. Frauwallner: Die Reihenfolge und Entstehung der Werke Dharmakīrti's, pp. 142—154. ディグナーガと並んで佛教論理學を代表する巨匠ダルマキールティの論理・認識論に關する著作の成立順序を、作品の內容から推定せんとしたもの。彼の主著 Pramāṇavārttika (Pv) の第一章は、ディグナーガの Pramāṇasamuccaya (Ps) 第二章に對應するものとされているが、Pv の他に三章と異り、その內容から見てヴァールティカと認め難く、この章にのみ自身の注釋 (vṛtti) を添えたことも、他の三章の場合と違う。むしろダルマキールティは Pv 以前に獨立の一書（*Hetuprakaraṇa?）を著わし、後に Pv の冒頭に置いたものと解される。次いで著者は、Ps と明かに Pv 以後の著作 Pramāṇaniścaya (Pn) との內容關係を檢討し、ダルマキールティは Pv を完成しなかつたものと推定している。Pn に續く著作としては、Niyāyabindu, Hetubindu があり、更に遲れて Vādanyāya が置かれる。

D. R. Shackleton Bailey: The Jātakastava of Jñānayaśas, pp. 22—29. コータン語「ジャータカ・スタヴァ」(Codices Khotanenses, Copenhagen 1938, Khotanese texts I, Cambridge 1945, pp. 197—219) を出版した H. W. Bailey 教授は、東北大學から提供された寫眞により、同名の梵語原典がチベット文字に轉寫され、且つチベット語譯を伴つて、テンギュール部に含まれていることを發見し（東北目錄 Bstan-ḥgyur No. 1178）、その梵文を再建して發表した（BSOS IX, 1939, pp. 851—859）。本論文の著者はこの梵文に出來得る限りの改訂を加え、英譯と注記とを附して、佛教文學に一佳什を添えた。梵文「ジャータカ・スタヴァ」は二十詩節（śārdūlavikrīḍita）からなり、內容はコータン語

のものと同一でないが、本格的なカーヴィヤ體で書かれた短篇として珍重するに足りる。

Ernst Waldschmidt: Zum ersten buddhistischen Konzil in Rājagṛha (Sanskrit-Bruchstücke aus dem kanonischen Bericht der Sarvāstivādins), pp. 817—828.

中亞發見の梵語佛教文獻を續々と出版して常に新しい資料を提供する著者は、ここにまたムルトゥック發見の二斷片（第一結集に關する說一切有部の記錄、恐らく律藏の一部。大正藏經二三卷、四四五頁以下參照）を公にした。まず寫本のままに轉寫し、次に繰返される文句並びに漢譯を參考として梵文を補修し、これに飜譯を添えている。第一斷片は會議の冒頭に近く、第一波羅夷（pārājayikā）の制定に始まり、第五僧殘（saṅghāvaśeṣa）に及び、第二斷片は會議の終末に近い一節を含んでいる。著者は更に二斷片の內容を、パーリ語律藏のチュッラヴァッガの相當個所と比較し、大綱においては一致しつつも、表現・排列に關しては、少からぬ相違のあることを指摘している。

Constantin Regamey: Randbemerkungen zur Sprache und Textüberlieferung des Kāraṇḍavyūha, pp. 514—527.

戰爭及び J. Przyluski 教授の早逝によつて頓挫したカーランダヴィユーハ（大乘莊嚴寶王經）の批判的出版を、ギルギット寫本等の新資料を加え、Marcelle-Lalou 孃と協力して實現せんとする著者は、エジャトンの近著（BHS Gr. and Dic., 1953）を方法論的見地から批判し、文字・綴字に關するネパール寫本の特質を擧げ（cf. Brough BSOAS XVI, 1954, pp. 351—375）、佛教原典の出版に對して必要な用意を述べている。次いで、佛教原典は必ず一個の原本（Urtext）にさかのぼるか否かという基本的問題に觸れ、ギルギット寫本對ネパール寫本、藏譯、漢譯の關係について見る時、カーランダヴィユーハは、サマーディラージャ・スートラ（月燈三昧經）の場合と異り、最初から互に著しく異る數種の異本を豫定し、しかもギルギット寫本がむしろ廣本を代表することを明かにしている。エジャトンによる佛教梵語文獻の三類の中、マハーヴァストゥにより代表される第一類及び第二類の偈文が、本來佛教梵語で書かれたことには異議がなく、第二類の散文及び第三類の古い作品の散文は、この佛教梵語を基礎としての梵語化と認められる。しかし第三類の新しい作品は、偈文をも含めて、最初から梵語で書かれたものであり、不正規形の混在は、作者の文法知識の缺乏、既に固定化した不規則形或いはプラークリット形の踏襲に由來し、殊にシンタックスの領域において著しい（e. g. abhūt 3. pl.）。佛教梵語における語法・文章法上の不規則な現象の多くは結局プ

ラークリットの連聲法(saṁdhi)の誤解に基づくことを、カーランダヴィューハからの實例によつて說明し、傳承の過程を考慮すれば、現存の寫本から第二類の散文及び第三類の經典の原形を回復することの困難を指摘している。

Walther Schubring: Zum Lalitavistara, pp. 610—655. ラリタヴィスタラの內容を簡明に摘記しつつ、レフマンの出版の不備(誤植、句讀の誤り、單語の分離・結合の誤り)を正し、新たな改正を加え、Laghulalitavistara (Aufrecht: Cat.…Bibl. Bodl. No. 142: p. 84, cf. Cod. Wilson. No. 266: p. 372)と稱する簡單な內容摘要をも利用して、若干の詩節に對する var. lectionis を擧げている。ヴェラーを始め多くの學者の努力にもかかわらず、未解決の點の多いラリタヴィスタラの研究に與える便益は頗る大きい。なお著者によれば、ラリタヴィスタラなる題名は、Lalita (=sundara=Bodhisattva)-carita-vistara の中略によつて生じたもので、本來「詳細なる菩薩の傳記」を意味するという。

J. W. de Jong: L'épisode d'Asita dans le Lalitavistara, pp. 312—325. ラリタヴィスタラの第七章に含まれるアシタの淨飯王訪問に關する挿話(ed. Lefmann p. 100. 20—108. 8 散文、p. 108. 10—112. 2 韻文)と法護譯普曜經(308 A. D.)並びに地婆訶羅譯方廣大莊嚴經(683 A. D.)の相應個所を比較し、梵文は㈠後譯に相當する部分(p. 100. 20—108. 8)、㈡前譯の一部に相當する分部(p. 108. 10—110. 14)、㈢兩譯に相當個所なき部分(p. 110. 15—112. 1)の三要素に分解されることを明かにし、アシタ挿話更に全ラリタヴィスタラは、地婆訶羅の時代とチベット語譯(九世紀の初四半期)との間に現形を整えたものと推定している。兩漢譯の主要な相違點は、アシタ挿話の中にその甥ナラダッタが擧げられるか否かにあり、佛傳文獻十三種につきこの點を檢討した結果、四五〇年以前に譯されたもの(九種)はナラダッタを擧げず、五八〇年以後に屬するもの(四種)はこれを擧げている。これによりナラダッタはアシタ挿話の原形に屬していなかつたことを知る。著者はなお、佛教の傳承中にとり入れられたアシタ及びナラダッタにつき、興味ある示唆を與えた後、上記兩漢譯の當該個所の飜譯を添えている。

Giuseppe Tucci: Ratnākaraśānti on āśraya-parāvṛtti pp. 765—767. タントラ佛教の學匠ラトナーカラシャーンティの Khamasa-tantra に對する注釋から、佛教神祕主義の重要な問題、āśraya-parāvṛtti 'the revolution of the support' に關する一節を、ネパールの寫本(一貝葉、十四・五世紀。一紙本)によつて校訂印刷し、これに相應するチベット語譯を添えたもの。

（中國・日本・チベット）Walter Fuchs: Eine buddhistische Tunhuang-Rolle vom Jahre 673, pp. 155—160. 一八九九年敦煌千佛洞から發見された羅什譯金剛般若經の後記に見える寺名・人名・用語について研究したもの。

Wilhelm Gundert: Die Nonne Liu bei Wei-schan, pp. 184—197. 禪の研究にもシナ學・日本學の提携による文獻學的基盤の重要なことを强調し、その一例として、碧巖錄から潙山（靈祐、七七一・二——八五三・四年）と劉鐵磨の逸話を詳しく解說したもの。

Martin Ramming: Eine neue Faksimileausgabe der Originalschriften aus dem Nachlass des heiligen Nichiren, pp. 484—488. 山川智應師を主幹とする大出版、「現存日蓮聖人御眞蹟」及び「現存眞蹟寫眞對照日蓮聖人標準御書」の概要を報告し、日本佛教の研究に對する學術的寄與としてその價値を推稱したもの。

Johannes Schubert: Das Reis-Maṇḍala. Ein tibetischer Ritualtext herausgegeben, übersetst und erläutert, pp. 584—609. ラマ教寺院において日々の勤行に用いられる重要な祭式文獻の原文・飜譯を提示し、詳細な解說と該博な注記を添えたもの。ここに豫定されているのは、メール山を中心とするインド的宇宙（cakravāla）で、この研究により、ラマ教の宇宙觀の理解に新しい光明が投じられた。

〔その他〕Louis Ligeti: Notes sur le colophon du "Yitikän sudur," pp. 397—404. 中亞出土のウイグル語佛教文獻は、Beš-baliq のウイグル人にのみ歸すべきでなく、また年代も九乃至十世紀に限られず、モーゴル時代に降ることも少なくない。十三乃至十四世紀にウイグル文藝復興のあつた點を指摘した後、Yitikän sudur "Sūtra des sept étoiles de la Grande Ourse" のコロフォンにつき詳細な檢討を加え、editio princeps の年代を一三二八年と決定している。

Annemarie von Gabain: Buddhistische Türkenmission, pp. 161—173. 二十世紀初頭の中亞發掘の結果、殊にトゥルファンから發見された遺物は、かつてトルコ人の間に佛教の榮えたことを示したが、著者はその跡を歷史に徵して明かにしている。西魏の丞相宇文泰すなわち北周の太祖文皇帝（五五六年歿）が突厥の雄傑木扞可汗（五五三——五七二年）のため長安に突厥寺を建立したこと、佗鉢可汗（五七二——五八一年）の時劉世清が涅槃經をトルコ語に飜譯したこと、同可汗の許に闍那崛多（五二八——六〇五年）及び若干の中國人竺僧の滯在したこと、西突厥も六世紀中葉以後西南トルキスタンの佛教中心地において佛教の感化に浴

したこと（ソグド人を媒介とするゾロアスター教の影響をも参考）、七世紀始め以來佛教を知つていたウイグル人の間における佛教の消長、特に九世紀以後高昌において受けた佛教文化の影響等の諸問題に觸れ、トルコ人の佛教は諸種の文化要素を混入しているが、チベットからの影響は少く、術語に關しても、コータン語・ソグド語・中國語の影響が認められると說いている。

Paul Ratchnevsky: Die mongolischen Grosskhane und die buddhistische Kirche, pp. 489—504. チンギスハーン（自らは終生シャマイズムの信奉者）が、信教自由の政策を採つて以來、元朝の終末にいたるまでの間に、佛教が次第に勢力を增し、國政に關與し、民衆の怨嗟を招いて、元朝滅亡の期を早めた經緯を論述したもの。

Erich Haenisch: Kapitel XVII von Jalavāhana aus dem kalmükischen Text des Altan Gerel, pp. 198—213. 一九二九年に金光明經のカルムイク語譯（Altan Gerel）を出版した著者が、同經の中にある長者の子流氷（Jalavāhana Śreṣṭhidāraka, Usu Orōlukci）の挿話の原文に譯注を添えたもの。頭尾の數句は、梵・漢・ウイグル・チベット・モーコ・カルムイク語で提示され、この經典の研究にポリグロット的知識の必要なことを如實に示し、注記によりカルムイク語譯が、モーコ語譯にも增して、チベット語譯に依存していることを敎えている。

〔中央アジア、トカラ語〕 中央アジア發掘研究の成果は、すでに擧げた論文の中にしばしば利用されている。ここには中亞の文字及びトラカ語に關する論文のみを揭げる。

F. W. Thomas: Brāhmī script in Central-Asian Sanskrit manuscripts, pp. 667—700. Hoernle: Manuscript Remains, General Introd. (1916) 以來始めて見る總括的敍述で、著者多年の研究と蘊蓄に照し、中亞ブラーフミー文字寫本の關係年代を決定するためにも極めて重要である。中亞寫本の文字を區別してヘルンレが、'Upright Gupta', 'Slanting G.', 'Cursive G.' と命名した由來を說明し、中亞及びインドにおける紙寫本の使用について述べ、g, ś, bh, m 等の字體の變遷を圖表によつて解說し、ギルギット及びバーミヤン出土の寫本に見られる文字の種類・特徵を擧げ、これら及びインドの諸文字(the 'Kuṣāṇa script', the 'Kura script', etc.) と中亞ブラーフミー文字との關係を考察した後、クチャー・トゥルファン出土の寫本につき、いわゆる Slanting Gupta の特徵・種別・發達・年代を詳論し、最後にコータン地域の Upright Gupta に對して同樣の檢討を加えている。

Werner Thomas: Die Infinitive im Tocharischen, pp. 701—764. トカラ語兩方言における不定法の用法に關する徹底的研究で、內容・分量から見て、記念論文集中の一篇とするより、單行本として刊行するに適する。著者は本論に入る前に、形態に關する事項を略述している (pp. 705—712)。まずA方言及びB方言における不定法語尾 -tsi と -ssi (-si) の分布を述べ (-tsi の直前に s がある時、Šorčuq 出土のA斷片は規則的に -ssi を示すが、B斷片は一般的にこの規則に從わない)、不定法はAにおいて現在語幹を基礎として作られるのに對し、Bにおいては接續法語幹から出發すること、トカラ語の不定法には時稱・ヴォイスによる區別のないこと、Bの若干の動詞は trans. infin. を conj. act. から、intrans. infin. を conj med. から作ること、不定法は時に使役の意味を表わし得ることを擧げ、不定法は原則として變化しないが、時に格の表示を伴うこと (但しAにおいては極めて稀) を指摘している。本論 (pp. 712—762) は約一千例につき不定法の用法を細く分類し、例證に飜譯を添え、トカラ語の理解に貴重な資料を提供する。著者は最後に結語として、不定法の命令的用法はトカラ語に見いだされず、プレディケイトとしての用例も比較的に少いが、不定法の名詞化 (具體的名詞となつた場合、e. g. A, B yoktsi 'Trank', śwātsi 'Speise, Essen', B krakecce wassi 'ein schmutziges Gewand'; 格を示す小辭の添加) は進展した旨を述べている。

Walter Couvreur: Kutschische Vinaya- und Prātimokṣa-Fragmente aus der Sammlung Hoernle, pp. 43—52. かつて S. Lévi により出版飜譯されたトカラ語B (Kuchean) の斷片 (JRAS 1913, pp. 109—120, JA 1912 I, pp. 101—111, Hoernle: Manuscript Remains 1916, pp. 357—376)、すなわち H 149. X. 3—5 を新たに寫眞によつて再校訂し、未發表の斷片 H 149. 337 (Pātayantika 69—75 を含む) 及び H 149 add. 131 (Śikṣā の一部を含む) を公刊し、飜譯と言語上の注記を添えたもの。トカラ語研究の初期を飾つたB方言の資料が、ここに改めて學術的要望を滿たす形において提示されたことは、斯學の進歩のため慶賀に堪えない。

〔チベット語學〕 Jacques A. Dürr: Wie übersetze ich Tibetisch? oder Probleme der vergleichenden Sprachwissenschaft der tibetisch-barmanischen Sprachgruppe, pp. 53—77. Morphologie du verbe tibétain (Heidelberg 1950) の著者が、チベット文章語における屈折動詞形の形態につき、その見解を要約したもの。梵語原典の

飜譯として、單に相互の對應に滿足することなく、チベット語動詞の形態をそれ自體の法則に從つて解明すべきであると主張する著者は、その歷史的研究の結果により、いわゆる單音節語（特にビルマ・アッサム語群）、ひいては多音節語（例えば die Kuki-Chin-Sprachgruppe）の究明にも資することを期している。最後に R. Schafer (BSOAS XIII, 1950), F. W. Thomas (Nam, an ancient language of the Sino-Tibetan borderland), J. Bacot (grammaire du tibétain littéraire) 等による最近のチベット語學關係の重要出版に對する批判が添えられている。

〔シナ學〕 Ulrich Unger : Die Shi-king-Zitate in Shuo-wen und Han-shi wai-chuan, pp. 768—807. 秦の始皇帝による焚書以後における詩經の傳承を略述し、毛詩と散逸した三家詩との異同を考證する第一歩として、說文と韓詩外傳との中に含まれる詩經の引用を毛詩の當該個所と並べて表示し、その重要な項について注解し、說文中の引用（四五〇項）の典據に關する問題、韓詩外傳中の引用（五五二項）の信用度に觸れたもの。

Fritz Jäger: Eine Textdublette im 97. Kapitel des Schi-gi, pp. 293—311. 史記の酈生陸賈列傳が、酈食其・陸賈・朱建の傳の後に、再び酈食其と沛公（漢の高祖）との會見の段を大差なく繰返している異例的事實を指摘し、史記における改竄の問題に觸れ、最後に兩酈生傳の飜譯を添えたもの。

Eduard Erkes: Das Schaf im alten China, pp. 82—92. 西北シナにおいて既に早くから家畜となり、次いで非常に古くから、中國全體の經濟生活及び文化に重要な意義をもつた羊についての文獻學的・文化史的研究。

Käte Finsterbusch: Shan-hai-ching, Buch 13: das Buch vom Osten innerhalb des Meeres, pp. 103—118. 山海經第十三を譯出し、水經注等を利用しつつ詳細な注解を施し、中國古地理の研究に有益な資料を提供したもの。

P. Poucha: Zum Stammbaum des Tschingis Chan, pp. 442—452. 成立年代を異にする蒙・滿・藏・及びイスラームの資料に基づくチンギスハーンの系譜は、個々の相違にもかかわらず、天から降された祖先に歸着させる傾向において一致する旨を指摘し、人爲的に整理された系譜に含まれる傳說・神話・民間傳承の要素を、地誌・歷史・東西文化交流の觀點から分析したもの。例えば Germ. Hemd は結局 Mong. čamča と語源的に親緣關係にあるとしているのは、この研究の副產物の一つである。

Herbert Franke: Zur Biographie des pa-ta shan-jen 八大山人、pp. 119—130. 奇骨をもつて鳴つた畫家八大山人

（十七・十八世紀、W. Speiser によれば、中國の van Gogh）の傳記を、文獻に徵して解明したもの。

Wolfgang Franke: Neuere chniesische Arbeiten zur Geschichte der frühen Ming-Zeit, pp. 131－141. 明代史の研究が他の時代のそれに比して振わないことを慨歎し、最近における中國學者の著作の中から特に推稱すべきものとして、吳晗の朱元璋傳の內容を詳述し、あわせて他の學者の明朝初期に關する研究若干を紹介したもの。

Jaroslav Průšek: Die Chui-tsü-shu, erzählende Volksgesänge aus Ho-nan, pp. 453－483. 現代中國の文化は古來の民衆文藝を基礎として發展を遂げつつあるが、從來かかる通俗文學の研究が等閑に附されていたことを遺憾とし、その一例として河南を鄉土とする物語式民謠「墮子書」の詩的構造・技巧・內容につき詳述し、他の地方の通俗文學またはこの流をひく新時代の詩人よりも保守的であり、壓迫者に對する民衆の鋭い諷刺諧謔に富むことを指摘したもの。

Günther Köhler: Das Mündungsgebiet des Hwang ho, pp. 357－364. 地理學者たる著者が一九三四年四月七日――十六日にわたり、黃河下流を旅行して得た實地見聞に基づく報告で、中國の治水工學に參考となるもの。

〔日本學〕 Günther Wenck: Zum Problem der nasalierten Verschlusslaute im Japanischen, pp. 892－902. Japanische Phonetik の著者が、詳細な說明及び例證を省きつつ、その研究の一端を理論的に要約したもの。日本語における音韻對立 /k/—/g/, /s/—/z/, /t/—/d/ は、東北方言の發音において、無聲・有聲の區別ではなく、無鼻音と鼻音との區別として現われ、/s/—/z/ においてのみ無聲・有聲の區別が附隨的價値をもつとし、東北方言以外においても、これと同じ現象が少くも部分的に認められることに注意し、これを日本語史の問題として取りあげている。著者はいわゆる mediae の鼻音化並びにいわゆる tenues の有聲化を反映する事實を、外國人による日本語の音寫（十世紀以來）及び日本語の內部に求め、記紀萬葉における漢字の用法を論じ、上述の特徵は古代日本語にさかのぼると主張する。この現象の起原、更に無聲・有聲の對立に移行した時期・地方・徑路の研究を今後の問題として殘しているが、その轉期は恐らく十七世紀の後半から十八世紀の前半に置かれると推定し、その發端は東部日本語に求められることを示唆している。

André Wedemeyer: Hitomaros letzte Liebe. Eine Deutung altjapanischer Gedichte aus dem Manyôshû, pp. 829－891. 人麻呂の祖先・生涯、特に家庭關係を詳しく檢討し、彼を柿本の佐留と同一視する說を強く支持して、詩

人の生存期を凡そ六六二——七〇八年と措定したもの。人麻呂は二人の妻と死別した後、石見の國で依羅の娘子を娶り、これが彼の晩年における唯一の妻であつたと主張し、萬葉集（岩波文庫本）二・一四〇、二・二二四——五のみならず、二・一三一——九、四・四九六——九、四・五〇一——三、四・五〇四、三・三〇三——四、二・一三一——九をも全て人麻呂と依羅の娘子とに關係せしめて詳細な解釋を加えている。

Horst Hammitzsch: Chinesisches im Jikkinshō, einer didaktischen Schrift der Kamakura-Zeit, pp 214—246. 十訓抄（一二五二年）は當時の青年の教育に資することを目的として作られたもので、單なる傳說集とは撰を異にするとし、佛教並びに漢學に對して深い關係をもつことを指摘し、進んで作者の問題を論じ、典據となつた和漢の書物を列擧し、最後に十訓抄の內容を詳しく解說したもの。

Otto Karow: Das Daidōruijuhō. "Klassifizierte Rezepte der Daidō-Periode" und die Reformbestrebungen des Kaisers Heijō, pp. 326—332. 平城天皇の大同三年に敕を奉じて編纂され、今は全く散逸した「大同類聚方」により古來の日本醫術の復興を計つた主要な動機は、同天皇の復古政策の現われと解すべきであると論じたもの。

〔エジプト學〕 Siegfried Morenz: Ägyptische Ewigkeit des Individuums und indische Seelenwanderung, pp. 414—427. インド人の輪廻思想とエジプト人の靈魂不滅に關する信仰との關係はしばしば論議され、後者に輪廻思想のなかつたのを認めることが、現時學界の大勢を支配しているが、著者はエジプト學者の立場から、ヘーロドトスの記述及び古代エジプト人の信仰を再檢討し、エジプト人にあつては個體の永遠性に對する意欲を認むべきで、靈魂と肉體との關係並びに現世觀を異にするインド人の輪廻思想とは、その本質において全く相違することを明かにしている。

（東京大學教授）